

もっと現場を知る！職員短期派遣研修報告書

所属名	総務部管財課	氏名	内田 晋介
派遣先 団体名	NPO法人 あしぶえ		
① 研修の日時・内容			
9月5日(土)しいの実シアター演劇 (公演ゲネプロ観劇)			
内容 <u>しいの実シアター演劇公演「ゼロ弾きのゴーシュ」のゲネプロの観劇</u>			
9月6日(日)しいの実シアター演劇公演 (表方体験と本番観劇)			
内容 <u>しいの実シアター演劇公演「ゼロ弾きのゴーシュ」表方体験</u>			
<p>駐車場スタッフとして、来場者の誘導を行った。公演の会場となるしいの実シアターは、駐車場からシアターまでの距離が遠いため、足が不自由な来場者にとって不親切なつくりとなってしまう。そこで、スタッフ間の意思疎通をとりながら、来場者のなるべく不便を感じないような対応をとりつつ、安全に車の誘導を行った。合間には、本番公演の観劇を行った。</p>			
9月17日(木) 人形劇講演の表方体験、演劇祭準備			
内容 <u>午前：人形劇団「ひぼぼたあむ」公演の表方体験(駐車場整理)</u>			
<p>保育園や幼稚園を対象として、八雲国際ミニ演劇祭で出演する人形劇団「ひぼぼたあむ」による人形劇公演のための駐車場スタッフ及び会場準備を行った。</p>			
<u>午後：八雲国際ミニ演劇祭に向けての準備</u>			
アンケートの折り込み等、ミニ演劇祭に向けての準備を行った。			
9月18日(金) 人形劇講演の表方体験、演劇祭準備及びスタッフ打ち合わせ			
内容 <u>午前：人形劇団「ひぼぼたあむ」公演の表方体験(駐車場整理)</u>			
<p>昨日と同様に人形劇公演のための駐車場スタッフ及び会場準備を行った。</p>			
<u>午後：八雲国際ミニ演劇祭で担当する係に分かれて、打ち合わせ</u>			
<p>NPO法人研修の県職員はインフォメーションスタッフとして活動することになり、同スタッフメンバーと打ち合わせを行い、本番に向け準備を行った。</p>			
9月19日(土)			
9月20日(日)			
9月21日(月)			
} 八雲国際ミニ演劇祭(表方体験)			
<p>3年に1度開催する国際演劇祭は継続しながら、今年は規模を縮小したミニ演劇祭を開催した。初の試みであったが、シルバーウィークのおかげもあり、たくさんの来場者で賑わった。</p>			
<p>研修生は、インフォメーションスタッフとして、会場準備及び商品販売等の来場者対応を行う。</p>			
9月30日(水) 八雲小学校 演劇ワークショップ			
内容 <u>午前：八雲小学校演劇ワークショップ見学</u>			
①集中する ②こころをひとつに ③失敗はたからもの の3つを目標として、			

八雲小学校3年生と一緒に演劇ワークショップに参加した。

演劇を行うチーム分け直前のワークショップであり、子どもたち同士がまとまり始めたタイミングであった。エアーながなわ飛びのながなわを回す役として、子供たちと活動を共にする時間もあった。

11月8日(日) 来て！見て！やくも収穫祭 表方体験

内容 八雲町内各施設で開催されたやくも収穫祭の表方体験

収穫祭の会場の一つであるかやぶき交流館の駐車場整理や来場者対応を行う。

12月11日(金)

内容 八雲小学校3年生 演劇ワークショップ本番観劇

八雲小学校三年生2クラス(4チーム)本番演劇を観劇した。

子どもたちの公演は「金の斧、銀の斧」「アリとキリギリス」の2公演であり、同じ公演でも子どもたちの工夫と演技により、違った演劇の出来となっており、子どもたちの成長を見ることができた。保護者が観劇しており、観劇間には保護者参加のワークショップも行われた。

12月13日(日) 落ち葉集め

内容 しいの実シアター敷地内の落ち葉清掃作業

雨の中しいの実シアター敷地内の落ち葉清掃を行った。

② 研修の感想

1. NPO法人あしぶえと地域の関わり

1-1 演劇を手軽に見ることの出来る環境

研修の始めに、「セロ弾きのゴーシュ」のゲネプロ観劇及び本番観劇を行った。ゲネプロ観劇というのは公演の前日に本番同様に舞台上で行う最終リハーサルであり、あしぶえでは、その様子を観劇することが出来る。私自身、演劇を見るのが好きで、年に何度か舞台を見ることはあるが、ゲネプロの観劇というのは初めてであった。

ゲネプロはリハーサルであるが、演技指導も熱が入り、劇団員の方が必死に悩む姿が印象的であり、とても緊張した空間であった。そのため、次の日の本番観劇で、なぜか私まで緊張するくらいであった。ここで、とても驚いたのが、ゲネプロを見たからこそ、本番での演技が大きく変わったことがわかり、全く違った演目を見た気分になったことだ。これは、演劇を違った目線で楽しむことができるよい機会となり、とても得をした気持ちになった。

また、演劇自体もレベルが高く、心が揺さぶられる体験ができた。これだけの高いレベルの演劇が、八雲にある小さなシアターで、身近にしかも安価で見ることの出来る環境は、全国を探してもそうは見つからないのではないだろうか。これだけの劇団が存在していることを市民として誇りに思うと同時に、これまで無意識であったことを、反省したいと思った。

1-2 NPO法人あしぶえとボランティアスタッフの関わり方

私の中で、ボランティアスタッフは受け身になりがちである印象があるが、あしぶえで活動するボランティアスタッフは全くその姿はない。時には、ボランティアスタッフからあしぶえ職員に対して意見を言い、職員もボランティアスタッフに対して、本気で返す。そんな、対等な関係でつくりあげてきたからこそ、より高みのあるイベントとして成長し続けているのだろう。それは、スタッフとして素人である私自身も例外でなく、職員の方から「どうしたらいいと思う？」と問われ

ることが多々あり、プレッシャーを感じながらも、スタッフの一員として必要とされていると実感できるとともに、責任感をもって活動を全うしたいと思うようになった。

あしぶえのボランティアは全国的にも着目されるほど地域に根差しており、参加者も積極的であるというが、ボランティアに関してはまだまだ課題があるようであった。ひとつとして、ボランティアの人数不足と育成の体制がある。特に男性の人数が足りない状況であることは、私も活動をとおして感じる事が頻繁に会った。活動の中で男性の方が力の発揮できる仕事(駐車場の整理や力仕事)というのは数多くあるが、女性と比べて個人で参加する人が多く、必要な人員が確保しづらい状況にあるようだ。

あしぶえ職員の方もボランティアについての課題を感じており、ボランティアスタッフの能力向上や継続参加を目的として、今後はボランティアスタッフをプロ化するという目標を掲げておられた。振り返り活動の中で、「共に歩める人をつくるのがまちづくりにつながる、まちづくりとは人づくりである。」という言葉があった。NPO法人活動において予算確保や施設維持等のハード面の課題もあるが、それ以上に同じ思いや熱量を共有する人をつくることは、NPO法人活動を継続できることになり、それは結果的に協同のまちづくりを継続できる体制つくりとなっていくのだろう。

2. 演劇教育について

あしぶえでは学校や企業に対して、コミュニケーションワークショップを開催しており、本研修内でも、八雲小学校のワークショップの見学と本番観劇を行った。このワークショップは次世代の文化芸術の担い手の育成が目的とされた、「文化芸術次世代育成支援事業」として、文化芸術団体が学校や公民館に出向き、実技指導・合同公演を行っているものの一つである。演劇は①「観劇をする場合」と②「演じる場合」があるが、その両方で参加者は様々な経験を得ることができる。

まず、①「観劇をする場合」であるが、『見えないものを見る』力を養うことと『見たくないものを見せる』経験をさせることができる。

演劇の表現方法は様々であるが、親切に全てを説明するわけではない。演劇は一つの動作や物、はたまた何も見えない余白に、何かをイメージして観る必要がある。つまり『見えないものを見る』力を養いながら、自然と創造力や創造力を養うことができる。

また、演劇は見て楽しい時もあるが、時には人との別れや裏切り、汚いもの、醜いもの、避けては通れないものをあえてみせることもある。そういった感じたくない気持ちは人の気持ちを乱すことが多い。演劇を通した疑似体験を通して、『見たくないもの見せる』ことで、悲しい・つらいといった、気持ちが揺さぶられる経験をする事で、子どもたちの感受性はより豊かになるのではないだろうか。

次に、②「演じる場合」であるが、これは特に八雲小学校のワークショップ見学を通して感じたことであるが、演劇をつくる経験をとおして、自分をさらけ出すということが重要であると感じた。人前で演じることは、子どもたちに限らず大人であってもとても恥ずかしい経験である。特に多感な時期の子どもたちにとって、人前で自分をさらけ出すことはとても勇気のいることであると思う。ワークショップでは、あしぶえの職員が本気で子どもたちと向かい合い、子どもたちの感情を引き出そうとする。子どもたちは悩みながら、時には泣きながら、時には怒りながら、いろいろな感情と葛藤しながら、自分たちの演劇を作り上げていく。

あしぶえの代表である園山土筆さんは「汚いもの、いやらしいもの、醜いもの、そこから出る

美しいものを見せたい」と言う。子どもたちは、感情のぶつかり合いをとおして、自分や友達の嫌な部分を見ていたのだろう。そこからできる美しい演劇をつくり出す経験は、一生の思い出になるのだと思うし、自分の気持ちを強くするきっかけとなる活動になるのだと思う。

また、現在の子どもたちは様々な要因はあるが、家族、学校や地域でのコミュニケーション力の低下が見られるという。演劇教育の目的は感情を爆発させることも目的の一つであることから、コミュニケーション力の向上もみられるようになるのだと思う。

3. 研修を通して感じたこと

本研修の事前研修の中でNPO法人の役割は、行政の手の届かない地域の課題について自発的にケアを行うことであるということを知った。その中で「地域の課題解決の手法として文化活動を挙げるNPO法人あしぶえは、いったい地域に何を求められているのだろう」、その疑問を解決するために私はあしぶえを研修先として選択した。

失礼なことを承知で言えば、研修前の私は文化活動がなくても人は生きていけるし、困る人も少ないと考えていた。研修を終えた今は、文化活動こそ現代社会を豊かにする一つの方法でないかと考えるようになった。それは、既述でもわかっていただけだと思うが、人とのつながりが希薄になりつつある世の中であるからこそ、演劇活動をとおし人との関わりが貴重な体験となり、結果、それは人と人をつなげ、豊かな社会を形成するきっかけとなるのではないだろうかと感じるようになった。

③ 最後に

お忙しいなか、長期間の研修を受け入れてくださった、NPO法人あしぶえの職員の皆さま、大変お世話になりました。この研修でできた人とのつながりを大切にしていきたいと思います。

④ その他特記事項

文化活動となるNPO法人あしぶえでの研修参加はハードルが高いように感じる職員も多いかもしれないが、周りには経験豊富なボランティアの方が多く、非常に参加しやすい環境であった。地域に出て活動したいと考えている職員には、ぜひこの研修を機会にあしぶえの活動に触れてもらいたいと思う。

★☆☆☆☆ NPO法人あしぶえHP (<http://www.yitf.org/>) ★☆☆☆☆

(注1)研修日時・内容等がわかる資料があれば、添付してください。

(注2)報告書は、平成28年1月31日までに人事課あてにメールで提出してください。



「ゼロ弾きのゴージュ」公演



人形劇公演に参加する子どもたち



「ミニ演劇祭」のフードコートコーナー



シアター内カフェ



しいの実シアター



来場者の対応をするボランティアスタッフ